

● 寺町のご案内 ●



元和3年(1617)に大名・戸田氏鉄がうしがね尼崎城を築き、城下町を建設するにあたって、散在していた寺院を、城の西にあたる現在のところを集めて、寺町をつくりました。寺町の区画は当初からほとんど変化がなく、現在約3.9ヘクタールの区画に11カ寺が集中しています。国指定の重要文化財7件をはじめ、県・市指定の文化財も多く残されています。寺町は城下町の面影をいまに伝えています。

尼崎信用金庫

創設	業	大正10年6月
出資	資金(資本金)	150億円
預金	量	2兆4,704億円
融資	量	1兆2,365億円
役員	員	1,430人
店舗	数	93店舗(うち出張所5)

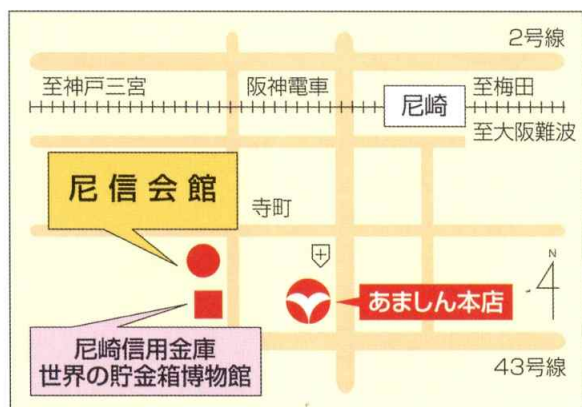
計数は平成28年3月末日現在です。

世界の貯金箱博物館

開館日	火曜日～日曜日・入館無料
開館時間	午前10時～午後4時
休館日	月曜日、祝休日(土曜日・日曜日と重なる場合は開館)、12月29日～1月5日
所在地	〒660-0863 尼崎市西本町北通3丁目93番地
T E L	06-6413-1163
(FAX)	

ホームページ <http://www.amashin.co.jp>

● 尼信会館もご来館ください。



阪神電車尼崎駅から南西へ徒歩5分

 **尼崎信用金庫**
あましん



阪神淡路百名所・あまがさきミレニアム遺産

尼崎信用金庫
世界の貯金箱博物館

夢に近づく音がする



心をためる ゆめうつわ

本館は目的のために、小さな猪俣をコレクションするための貯金箱。それは夢に、お宝をためるだけにとどまらず、心をこめつたさまざまな貯金箱を展示ののちも残ります。

たくさんのお宝の中からは、世界中の人のあたたかい思いが伝わって来ます。ぜひ、お宝をためるように見てください。

小さなコイン
しっかり折りたたんだお札
一枚、そして一枚、
貯金箱へ入れるたびに、夢に近づく音がして、
心にほのほのこだまします。
世界中のいろいろな貯金箱
かたちやデザインはさまざまでも、
一枚のコインに託すところはひとつ。
貯金箱——それは不思議な温もりのある夢ボックス。

ようこそ 尼崎信用金庫 世界の貯金箱博物館へ

日本はもちろん、欧米や中南米、アジア、
中東など世界62カ国の今と昔の貯金箱を
約13,000点収蔵。「世界の貯金箱博物館」
は全国でもユニークな博物館です。
楽しい仕掛けのある貯金箱、外国の珍しい
貯金箱など、多種多彩。「貯金箱と暮らし」
をテーマに貯金箱の歴史、貯金箱にみる
世界の風俗など、楽しくご観覧いただけ
ます。

貯金箱のお話

歴史とおもしろ貯金箱

呼び方にもお国から

落ちたら出られぬ 「地獄」とは？

現在、私たちは「貯金箱」と呼んでいます。むかしは「貯金玉」とか、「富久箱」などと呼ばれ、変わった名前では、お金を入れて、「落ちたらもう二度と出られない」という意味で、「地獄落とし」「地獄」とも言われていました。

また、広い意味では「銭筒」や商売用に使われていた「銭箱」も貯金箱です。

お隣の韓国では黙って貯えるというので、「啞壺」、中国では一杯になると壊すので、「撲滿」「儲蓄筒」という名で呼ばれ、台湾では「招・財・進・宝」の漢字を合わせた文字(下図)が貯金箱に書かれています。



「しょうざいしんほう」

ヨーロッパの、英語を使う国々では Money Box (Bank) や Saving Bank、Penney Bank。特に多い豚の形をしたものは、Piggy Bank と呼ばれています。ドイツでは Spardose (貯金箱)、Sammelbuchse (集金箱) などと呼ばれています。フランス語では Tirelire です。これは中世の頃、物乞いの子供たちが陶器の容器を持って、教会の出口で信者を待ちうけ、お金を恵んでくれたお礼に容器を振った時の「チリリン」という響きからつけられたとも言われ、フランス人らしいセンスのよさがうかがわれます。

多くの国で貯金箱にいろいろな呼び方があるのは、それだけ貯金箱が人々の暮らしに深くかかわってきた証といえるでしょう。

それにしても、貯金箱の名前が、漢字圏では「自分のために」「貯める」という意味が強く、英語圏では「人のため」「救済する」といった意味が含まれているのは、単に貨幣経済の発達の違いだけでなく、宗教をはじめ、文化そのものの違いを感じないではいられません。

貯金箱の歴史

中国では2,100年も前に

貯金箱のルーツというと、アジアでは今から2100年前、前漢時代のもので、中国の雲南省滇王一族の墓から出土した「貯貝器」だろうと考えられています。

これは、青銅製で円筒筒型をしており、当時は「子安貝」がお金として使われていたので、貯貝器はつまりお金を貯める器といえるでしょう。

ですから、今も財貨に関する漢字には「貝」という字がくっついているのです。



貯貝器(前漢時代・青銅)

ヨーロッパでは、 教会献金箱がルーツ

ヨーロッパでは、貴金属の小片などをいれてもらうために教会に置かれた「献金箱」が貯金箱のルーツといわれます。これは貨幣が登場する前から使われており、古代エジプトやギリシャ、エルサレムなどの古い遺跡で発見されています。やがて、紀元前7世紀頃に貨幣が生まれ、アテネやオリンピア遺跡からは紀元前300年頃の宝物寺院の形をした貯金箱が発見されています。これは粘土製で、テサウロス (Thesaurus) と呼ばれ、やがてトレザー (Trésor 金庫) という言葉の語源になったといわれるものです。



宝物寺院形 テサウロス
(紀元前300年頃・粘土・
写真は複製)

さらに、古代ローマの遺跡からは3~4世紀の洋梨型の陶器製貯金箱が数多く見つかり、当時の人々が貯金箱と深くかかわっていたことがわかります。この貯金箱の型は女性の乳房をかたどっているとみられ、ヨーロッパの貯金箱の伝統的な形として、イタリアなどでは現在もこの形の貯金箱が使われています。



洋梨型
左・3~4世紀古代ローマ地方・粘土・複製
右・現代

日本では縄文時代の カメが元祖・貯金箱？!



せんべい壺 (室町時代 伊賀焼)

それでは、日本の貯金箱のルーツはというと、縄文時代の末頃から現れる「壺」ではないかと考えられています。

その頃、稲作が始まり、種もみや穀物を貯える必要が起こってきました。壺は口よりも胸の部分が大きく、内部が広くて物をいれておくのに適した形です。「貯える」「備える」という考えが、この頃から始まっているといえます。

だから、壺や壺は貯金箱の元祖というべきものでしょう。

室町時代あたりになると、壺の形も使用目的に分けて作られています。その中のひとつに、伊賀で焼かれた「せんべい壺」という深さ28cmぐらいの壺があります。この壺は銭が入って出土するので、「せんべい」とは「銭瓶」の意味ではないかと思われる。とすると、これは具体的に名づけられた貯金箱の祖先といえそうです。

中世ヨーロッパに カギ付き貯金箱が出現

ヨーロッパでは中世に入ると、金属の精錬や加工の技術が発達し、各国王朝の華やかな宮廷生活や貴族文化を思わせる見事な細工が施された貯金箱も登場しました。使われている材料も鋳鉄、真鍮、錫、金、銀などと多彩で、18世紀始めまではシリンダー形の鉄の貯金箱に人気がありました。その後形はビールをのむときのジョッキ型のものが多く作られました。この時代のものはすでに南京錠が取り付けられ、コインの入口には抜き取り防止の止め金が付けられるなど、中身を守る工夫も進んでいます。また、この頃に動物の形をした焼物の貯金箱も各種作られ、こちらは日本のものと同様、一杯になると割って取り出すスタイルになっています。



ジョッキ型 (中世ヨーロッパ・金属)

花のお江戸は ご存知千両箱

わが国では、江戸時代に入ると徳川家康によって貨幣制度がととのえられ、それにもない商業活動が盛んになりました。



銭箱 (江戸時代・木製)
四方に出た木をたたみの下などに敷いて
持って逃げられないように工夫。
銭筒 (明治時代・竹製)

しかし、この時代の金融は「両替屋」「掛屋」「札差」「頼田子」など、武士、商人や農民の一部など、ごく限られた人々に対するもので、一般的なものではありませんでした。このため貯金箱と呼べるものも、よくご存知の千両箱や商家が使った木製の銭箱、また、広く庶民の使った竹筒に入れ口を作った銭筒、それに銭壺がある程度でした。

明治時代 やきものの「貯金箱」が全盛

日本で、今のような公共的で国民大衆を対象とした金融のしくみができたのは、明治になり欧米の近代的な制度がとり入れられてからです。

明治時代に入り、銀行制度や郵便貯金制度がととのい、国民一般から受け入れられたお金は、金融機関を通して、いろいろな産業の発達のために使われました。

開国後の富国強兵や産業振興のため、勤儉節約の思想が高まるとともに、貯金箱も江戸時代の壺や銭箱、銭筒に代わって、一般の人々を対象としたものがたくさんあらわれるようになりました。

明治初期の貯金箱は一般に「貯金玉」と呼ばれていました。これは、持っているときどんな願いごとかなう「如意の玉」つまり「宝珠」を形どっています。大きな目的のために小銭を少しずつ貯める器として、これを選んだ先人の知恵はさすがといえるでしょう。



宝珠・貯金玉 (明治時代など・焼き物)

それにしても、この宝珠と2,000年前のヨーロッパの洋梨型の貯金箱をくらべると、とてもよく似た形をしているのは不思議な気がしますね。

さて、「貯金玉」は東京・浅草の今戸焼が発祥ではないかといわれます。その後、各地の窯元でも、その土地土地に古くからある郷土人形や民芸品に穴を開けたものがあらわれました。とくに、えびす、大黒、ほてい、だるま、福助、招き猫など、縁起物の置物は、いち早く貯金箱に変身することになりました。

アメリカでは カラクリ貯金箱が大ブーム

その頃、アメリカでは鉄製の仕掛けのあるカラクリ貯金箱が大ブームとなりました。

その中でもおもしろいものを紹介しますと、犬の口にコインを置いてレバーを押すと、犬がとび上がってピエロの口を持った輪をくぐり、樽の中へコインを落とす「トリック・ドッグ」大砲の口にコインを置いてレバーを押すと、そばにいる兵士が振り上げていた手を下ろし、同時にコインが城壁に撃ち込まれる「砲兵貯金箱」といったものがあります。

こうしたカラクリ貯金箱は実に300種類も作られたといわれ、それぞれの仕掛けが特許を認められているほどです。



トリックドッグ (19世紀・アメリカ・鉄)



ウィリアムテル (19世紀・アメリカ・鉄)

貯金箱 日本と外国

似ている? 似てない?

①どちらも好きな縁起物

ここで日本と外国の貯金箱を比較してみますと、第一にどちらも縁起物が多いという点が似ています。

日本については先に紹介しましたが、外国では古くは金の卵を生むニワトリ、勤勉な蜜蜂と蜂の巣、幸運を呼ぶてんとう虫、慎重な亀、かしい象など、多彩です。とくに、豚はニワトリとともに古くから貯金箱に使われました。これは多産、謙虚さ、有用性などから幸運のシンボルとされたほか、村民がお金を出し合い、貧しい人のために豚を買ったという「アントニウスの豚」のお話しに由来しているという説があります。



縁起物の貯金箱・日本(上)と外国(下)



②日本のものは

割って取り出すタイプが多い

2つ目は、欧米のものは鍵つきが多く、お金一杯にならなくても、鍵をあけさえすれば、必要に応じて使えます。

これに対して日本のものは割らないとお金を取り出せないものが多く、一杯に満たすことを心掛けさせ、一杯になっても割るということに、心理的な抵抗を感じさせてしまいます。ただ、ひたすら貯める、というのが特徴です。これは日本の貯金箱が「貯

める」器として登場したのにくらべ、西欧のものは「献金」の器としてあらわれたという文化の違いによるものかもしれません。

③硬貨を入れるアナが違う

3つ目の特徴は硬貨を入れる穴のあけ方の違いです。

例えば、外国の人形の貯金箱で頭のとっぺんをタテに割ってコインの投入口を作ったものがあります。日本のものにはこのようなドライな穴のあけ方は、まず無いといっていいでしょう。日本のものは、できるだけ頭を割ることをさげ、背中や肩などに硬貨の投入口を設けていることが多く日本人らしい優しさがみられます。

④時代を反映

4つ目はどの国の貯金箱も時代の意識や生活感情をよく反映しているということです。貯金箱をみていると、世界各地の流行がよくわかります。

何でできてるの?

貯金箱を素材の面からみると、最も古いものは土で、その後、文明の発達とともに焼物、青銅、鉄、金、銀、銅、その他の金属が使われます。もちろん、木や紙も用いられ、アジアでは竹も仲間入りします。その他では皮、ガラス、石膏、ゴム、コルク、珍しいものではヤシの実やその他の果実、布、毛糸などもあります。最近ではもっぱらプラスチック類全盛の感があります。



ヤシの実 (現代)

ガラス (現代)

毛糸のくつ下 (現代)

世相を語る貯金箱

貯金箱にも 西欧化の波

明治以後、急速に西欧化を回ったわが国を象徴するように、貯金箱の世界にも欧米調があらわれます。例えば、欧米の形をそっくりまねたものや鍵式のものごとり入れられ、精巧さが加わり、貯めたお金の有り高がわかる仕掛けのものもできました。



そっくり貯金箱 19世紀・金属
左:東京貯蔵銀行 日本
右:インド銀行・イギリス

素材の上でも、古いものは日本古来の木、竹、陶土、紙などの材料が用いられ、工業化の進んだ大正時代から昭和時代になると、鉄、銅などの金属が使われるようになりました。

もともと、第2次大戦中には、耐乏生活から粗末なボール紙製のものが、日本やドイツにあらわれるようになりました。

しかし、いかに欧米化しても、日本では縁起物の貯金箱に根強い人気がありました。

戦後は急速に科学技術が進歩し、とくに、エレクトロニクスや石油化学の発達はめざましいものがあります。それらの産物として、貯金箱の素材もポリエチレンや塩化ビニールのもものが多く作られました。

マンガの主人公などをモデルにしたキャラクターの貯金箱も登場し貯めることよりも、持つ楽しみを優先する傾向が強まっています。



ごそんじ子供たちの人気者

おしゃべりハイテク貯金箱も

オートメ化が進んで、均質な貯金箱が大量生産され、最近では貯まった金額がデジタル表示されたり、金額を合成音声で知らせ、目標額が貯まると自動的にフタが開くといったアツと驚くハイテク貯金箱もあらわれています。

これらの貯金箱はどれをみてもソツがなく、アイデアも斬新なのですが、昔のものにくらべて何か味わいが薄いように思われてなりません。

科学の進歩、技術の向上が進むほど、人の手や心の温もりにひかれるのでしょうか。

ゴセンエン
タマッタヨ
オメテウ



イチマン
エンマテ
ガンバルノ!!

貯金箱よ、 永遠に!

それにしても、カードがお金の代用品になり、子供のお年玉が数万円にもなる時代になって、貯金箱はこれから先、どうなるのでしょうか。

「母の日のプレゼントに」「どうしても欲しい品物の資金に」と小さな硬貨をコツコツ貯めた貯金箱。

手にのせて、貯まった硬貨の重さ確かめ、振ってみては使いみちに想いをめぐらせた貯金箱。

おてつだいや肩たたきをしてもらったおだちんを小さな貯金箱に入れる時、わたしたちが貯めていたものは、実はお金以上のもつともつと大切なものだったのかもしれない。